



1. 閉校後の小学校校利活用の促進案を発表した山田昭彦支援員（梁川町白根地区担当）/2. 明治大学農学部の小田切徳美教授がコーディネーターを務めた/3. 地域おこし支援員が地域に与える刺激について議論を交わす/4. 真剣に耳を傾ける聴衆/5. 吉田邦彦支援員（梁川町五十沢地区担当）は柿の皮などの資源の活用について報告

「伊達な挑戦者たちが活動を報告」

1月17日、保原市民センターで伊達市地域おこし支援員活動報告会が行われ、約150人が参加しました。現在活動中の6人の地域おこし支援員が1年間の実績、今後の活動の展望について報告。地域資源を活用した産業の創出や、アートを通しての地域づくりなど、住民と協力して取り組んできた活動を発表しました。報告会の後は、地域おこし支援員の受け入れと地域の変化をテーマにパネルディスカッションが行われ、支援員を受け入れている地区の代表らが意見を交わしました。

市長日誌

「子どもと遊び」

過日、伊達市で「子育てと教育を考える首長の会」が開催されました。

会議に先立ち、参加自治体を保原、梁川の「屋内子ども遊び場」に案内しましたが、「様に驚いておりました。言うまでも無くこの施設は、あの3・11の放射能災害後、外で遊べない子どものために設置したもので、県外の方には想像もできない施設なのです。

しかし、時間の経過と共に外で遊べるようになって、この施設の必要性に変わりはありません。それは、現代の子どもが、みんなで思いっきり外遊びをする、ということがなくなっていることに気付かされたからです。

会議では、子どもの運動について山梨大学の中村教授が基調講演をされ、私はいくつか感銘を受けました。先生いわく、「子どもにとって遊びは不可欠であって、それが十分でない子どもは心身の発達に大きな影響がある」とのこと。

子どもが我を忘れて汗をいっぱいかいて遊ぶことは、実は勉強にも好影響があるのです。「遊んでないで勉強しなさい」ではなく、まず目いっぱい遊ばせ

満足した後勉強させれば速やかに終わり、ぐっすり眠れる

すると朝、目覚めが良い。そしてしっかり朝ごはんを食べて学校へ行くという生活が大事なこと。同時に遊びを通して発育に必要な運動ができるだけでなく、仲間と仲良くする方法や遊びの中で危ない行動に対する危険予知など、いろいろな知恵が自然と養われるのです。昔はガキ大将がいて、遊び方を教えたり、年齢差のある子どもも一緒に遊ぶための思いやりのルールなどを取り仕切っていたのですが、現代ではそうした存在も無いので、専門職の「プリーダー」が必要であるとのこと。目からうろこでした。

また、フランスの良い発育のため少年時代は様々なスポーツをする事が必要として、アメリカのスポーツクラブは3種類以上の種目が義務付けられ、日本の「スポ少」のような野球だけとかサッカーだけとかのスポーツクラブは認められないのだそうです。

ともあれ、子どもにとっての遊びは、単なる遊びでは済まされない大事なことであることを思い知らせられた機会でありました。

